

2022 年 3 月

食料安全保障月報

(第 9 号)



令和 4 年 3 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 3 月食料安全保障月報（第 9 号）

目 次

概要編

I	2022 年 3 月の主な動き	1
II	2022 年 3 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 ロシアのウクライナ侵攻による穀物輸入国への影響	4

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	8
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	9
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	10
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	12
5	食品小売価格の動向	16
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	17
7	FAO 食料価格指数の推移	19

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞ 2021/22 年度の輸出量は過去 6 年で最低	
	＜カナダ＞ 2021/22 年度末在庫は減産により過去最低の見通し	
	＜豪州＞ 2021/22 年度の実産量、輸出量は史上最高の見通し	
	＜EU27+英国＞ 2022/23 年度の冬小麦はフランス等では休眠期を終了	
	＜中国＞ 2021/22 年度の実輸入量は前年度に比べ 10.5%減少する見込み	
	＜ロシア＞ ウクライナ侵攻に係る経済制裁の影響で輸出量 300 万トン下方修正	
	＜ウクライナ＞ 史上最高の豊作もロシアの侵攻により輸出量 400 万トン下方修正	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量史上第 2 位、エタノール用需要増、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 南部の高温・乾燥の影響も、生産量史上最高の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 高温・乾燥も、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量史上最高、消費量も史上最高の見通し	
	＜ウクライナ＞ 紛争による黒海の港閉鎖の影響等で輸出量 6.0 百万トン下方修正	
3	コメ	15
	＜米国＞ 中粒種の輸出価格が史上最高値の 1,350 ドル/トン	
	＜インド＞ 2021/22 年度の実産量が 129 百万トンで史上最高	
	＜中国＞ 2022 年は黒龍江省等で作付面積を削減する計画	
	＜タイ＞ 輸出量の上方修正により単独で世界第 2 位のコメ輸出国	

＜ベトナム＞2022 年の冬春作の収穫進捗率は 11.4%

II 油糧種子

大豆・・ 2 1

＜米国＞ 生産量は史上最高も、輸出減の見通し

＜ブラジル＞南部の高温・乾燥で単収下方修正、生産量は減産見通し

＜アルゼンチン＞高温・乾燥で面積・単収下方修正、輸出税は継続

＜中国＞ 減産見通し、消費量・輸入量は下方修正

＜カナダ＞ 西部での高温乾燥の影響で減産見通し

【利用上の注意】

表紙写真：

ウクライナのドニエプロペトロフスク州の冬小麦の圃場(3 月 3 日撮影)

小麦の状態は良好もしくは並の状態、生育段階は分けつ期。ロシアのウクライナ侵攻により、肥料の供給が困難な状態となっている。

(概要編)

I 2022 年 3 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2021/22 年度の作況については、北半球はほぼ確定したが、収穫が行われている南半球は今後も変動する可能性。

品目別にみると、3 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、生産量は史上最高となるものの、ロシアのウクライナ侵攻に関連し、ロシア・ウクライナの小麦輸出量が下方修正されたこともあり、国際相場は過去最高を更新する等、高い水準の中で不安定な動きで推移しており、今後も注視が必要。

一方、とうもろこしについては、ウクライナの輸出量が下方修正されたこと、大豆については、南米の乾燥の影響で、生産量が 3 か月連続で下方修正されたことで、いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：2 月）については、主に穀物（141→145）、植物油（186→202）及び乳製品（133→141）が上昇した影響により、1 月より上昇（136→141）し、2011 年 2 月以来過去最高となった。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録して以降は下落傾向で推移した後、直近では上昇傾向。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、3 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 米国の 2022/23 年作付面積は小麦、大豆増、とうもろこし減（農業アウトルック）

米国農務省（USDA）は今後 10 年間の農業見通し等を議論する第 98 回の農業アウトルックフォーラムを、2 月 24 日～25 日にオンライン形式で開催した。これによると、2022/23 年度のとうもろこしの作付面積は、3,723 万ヘクタール（対前年度比 1.5% 減）と減少するものの、大豆は、3,561 万ヘクタール（同 0.9% 増）、小麦は 1,943 万ヘクタール（同 2.8% 増）と増加する見通し。

生産量は小麦、とうもろこし、大豆とも前年度より増加する見通し。なお、期末在庫率は小麦は 37.0%、とうもろこしは 13.2% と前年度より上昇するも、大豆は 6.7% と低下する見通し。

2 中国の一号文件で生産地で増産、消費地ごとに自給率向上

2 月 22 日に一号文件（中国共産党と国務院（内閣に相当）が連名で発出するその年の最初の文書で、例年、農業・農村・農民の三農問題を取り上げている）が公表された。その中では、6 億 5,000 万トンの食糧（穀物、豆類、イモ類計）生産の確保を目標としている。また、中国内を生産主体地域、消費主体地域、生産消費均衡地域の 3 つに分け、産地での食糧（穀物、豆類、イモ類計）生産力の向上、消費地での食糧の自給率の向上、産地・消費地での食糧の基本的な自給をうたっている。

3 豪州冬穀物・油糧種子生産は史上最高の見通し

農業資源経済科学局（ABARES）の「Australian Crop Report」（2022.3.1）によれば、2021/22 年度の冬穀物・油糧種子は収穫が終了し、史上最高を更新し、6,190 万トン。うち、小麦は 3,630 万トン、大麦は 1,370 万トン、菜種は 640 万トンとそれぞれ史上最高の見通し。州別の冬穀物・油糧種子の生産量は、西オーストラリア州が史上最高の 2,310 万トン、ニューサウスウェールズ州が前年度より減産も史上第 2 位の 1,880 万トンと豊作。しかしながら、前年 11 月の降雨により収穫が遅れ、品質が低下し、低タンパク質含有率で飼料グレードとなる小麦が増加している。

夏穀物・油糧種子は生育期で、平年以上の降雨に恵まれ、ソルガムは 260 万トンと史上第 3 位の生産量となり、コメも前年度より 38% 増の 63 万もみトンの見通し。

4 ロシアの侵攻によるウクライナの農業生産への影響

3 月の国際連合食糧農業機関（FAO）の予測によれば、ロシアの侵攻に伴うウクライナの農地への直接的な被害や営農活動の制限及び労働力の不足により、2022/23 年度の農産物生産について、次のような影響を受けるとみられている。

- ①小麦などの冬作物については、20%の農地で収穫が出来ず、収穫がされた農産物についても、肥料不足や収穫遅れなどから単収が 10% 低下する。
- ②とうもろこしやひまわりなどの春作物についても、30%の農地で作付が困難となり、単収も 20% 低下する。

Ⅱ 2022 年 3 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、2 月末、340 ドル/トン台前半で推移。3 月に入り、ロシアのウクライナ侵攻による世界的な小麦の供給混乱の懸念から上昇し、3 月 7 日には史上最高の 523 ドル/トンに値を上げた。その後は、値を下げたものの、黒海地域の輸出の混乱に下支えされ、3 月下旬現在、410 ドル/トン前後で推移。

とうもろこしは、2 月末、270 ドル/トン台半ばで推移。3 月に入り、ロシアのウクライナ侵攻の深刻化、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥によるさらなる減産懸念や原油価格の上昇等から上昇し、3 月下旬現在、290 ドル/トン台後半で推移。

コメは、2 月末、430 ドル/トン台半ばで推移。3 月に入り、ロシアのウクライナ侵攻が深刻化する中においても新規の需要が乏しく、ほぼ横ばいで推移し、3 月下旬現在も 430 ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、2 月末、600 ドル/トン台半ばで推移。3 月に入り、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥によるさらなる減産懸念や USDA の 3 月需給報告や南米の現地機関の見通しが大豆生産の大幅な減少となったことに加え、ロシアのウクライナ侵攻の深刻化、植物油価格全体の上昇等を背景に値を上げ、3 月下旬現在、620 ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から 740 万トン上方修正され 27.9 億トン。消費量は、前月から 180 万トン上方修正され 27.9 億トン となり、生産量が消費量をわずかに下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.6%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで上方修正され、穀物全体で上方修正され 27.9 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦で下方修正、とうもろこし、コメで上方修正され、穀物全体で上方修正され 27.9 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正、コメで上方修正され、5.0 億トンの見込み。

期末在庫量は、8.0 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は前月から上方修正された。

(注：数値は 3 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を下回り 6.0 億トン。消費量は前年度を上回り 6.1 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、17.1%となる見込み。

(注：数値は 3 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：ロシアのウクライナ侵攻による穀物輸入国への影響

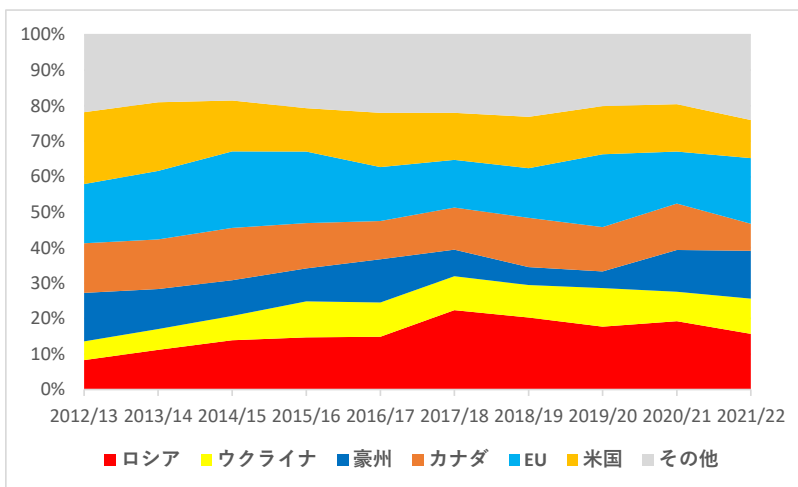
我が国はロシア、ウクライナからほとんど穀物を輸入していないが、中東諸国は穀物輸入の多くを両国に依存しており、エジプトの小麦輸入における両国のシェアは80%を超えるといわれている。東南アジア諸国でもインドネシアなどが輸入している。一方、ハンガリー等で穀物の輸出規制が導入された。3月上旬には、小麦のシカゴ相場は史上最高値を更新し、3月7日には期近物は14ドル/ブッシェルを超えた。

ロシアのウクライナ侵攻に伴う、国際需給への影響についてまとめた。

1 ロシア、ウクライナの穀物輸出状況

ロシアとウクライナは小麦、大麦、とうもろこしを始めとする穀物やひまわり油などの植物油の輸出国であり、世界的に大きなシェアを占めている。両国で小麦と大麦は3割近く、とうもろこしも2割、ひまわり油に至っては8割の輸出シェアを占めている。米国農務省（USDA）が3月9日に公表した2021/22年度の穀物等の需給見通しでは、今般のウクライナ情勢を受けて、ウクライナとロシアの穀物や油糧種子の輸出量を下方修正した。

図1 ロシア／ウクライナの穀物等の輸出シェアの推移
小麦：ロシアとウクライナのシェアは3割程度

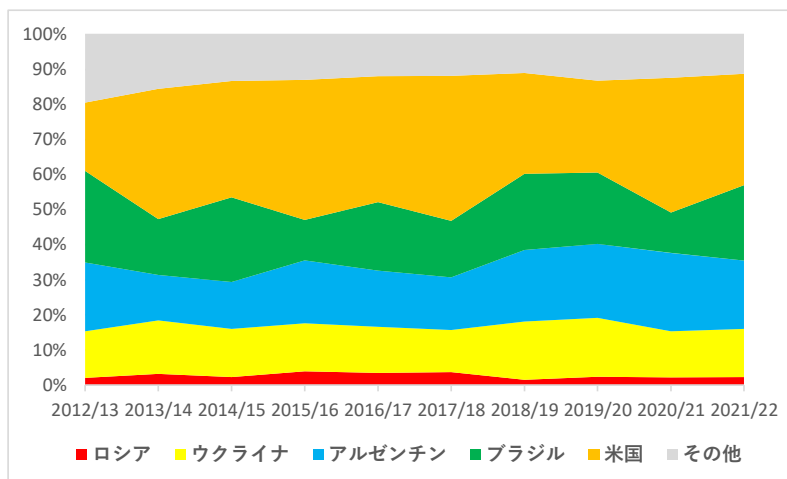


とうもろこし：ロシアとウクライナのシェアは2割程度

(1) ウクライナ

ウクライナについては、穀物輸出の中断により、小麦の輸出量を400万トン下方修正し2,000万トン、とうもろこしの輸出量を600万トン下方修正し2,750万トンとした。ひまわり油の輸出量についても90万トン下方修正し、575万トンとした。

2月下旬から、ウクライナの穀物輸出は停止されており、ウクライナ政府は、3月に入り小麦やとうもろこしなどの穀物については、輸出許可制を導入した。



出典：USDA「PS&D」（2022.3）を農林水産省で加工

USDAの「Feed Outlook: March 2022」によれば、特にウクライナの穀物輸出への影響が大きく、とうもろこしの当初輸出見通し3,350万トンのうち、その半分は輸出が終了したが、残り半分はまだ輸出されていない。このため輸出量を下方修正したとしている。その要因とし

ては、少なくとも

- ①ロシアの軍事行動で、穀物備蓄の施設が被災したこと
- ②ロシアの侵攻で穀物インフラや輸送に被害を与え、黒海の輸出港への輸送が困難なこと
- ③最も大きな要因で、ロシアの侵略後、すぐに黒海の輸出港が閉鎖されたこととしている。

輸出できないとうもろこしは在庫となっているが、一部は被害を受けており、将来的にも輸出は難しいとみられている。

また、3月の国際連合食糧農業機関（FAO）の予測によれば、ロシアの侵攻に伴う農地への直接的な被害や営農活動の制限及び労働力の不足により、2022/23年度の農産物生産が以下の影響を受けるとみられている。

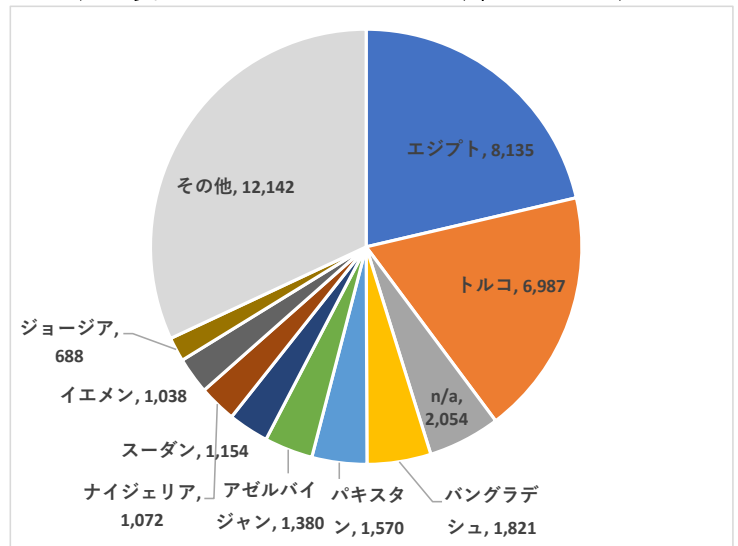
- ①小麦などの冬作物については、20%の農地で収穫が出来ず、収穫がされた農産物についても、肥料不足や収穫遅れなどから単収が10%低下する。
- ②とうもろこしやひまわりなどの春作物についても、30%の農地で作付けが困難となり、単収も20%低下する。さらに、農家は、小麦と比較して肥料が比較的多く必要なとうもろこしや、製品の輸出インフラが損傷したひまわりよりも、地域の食料安全保障のため、ジャガイモなどを植える可能性がある。

（2）ロシア

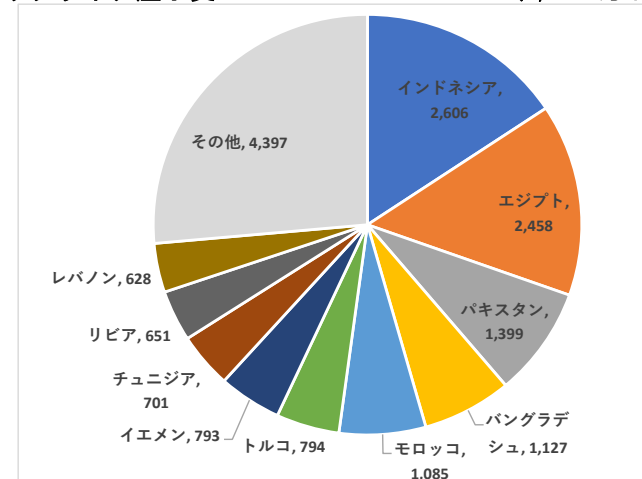
ロシアについても、欧米諸国等からの経済制裁の影響等を考慮して小麦の輸出量を300万トン下方修正し、3,200万トンとした。ひまわり油の輸出量も15万トン下方修正し、365万トンとした。なお、とうもろこしについては輸出数量が少ないことや、イラン向けについてはカスピ海経由で輸出できること等から修正はされていない。

ロシアは、前年から賦課している小麦

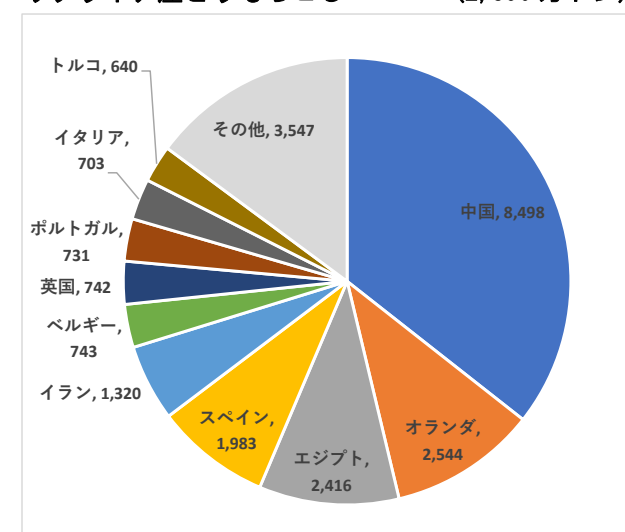
図2 ロシアの小麦、ウクライナの小麦、
とうもろこしの輸出先（2020/21年度）
ロシア産小麦 (3,800万トン)



ウクライナ産小麦 (1,660万トン)



ウクライナ産とうもろこし (2,390万トン)



出典：各国統計資料を農林水産省で加工

ロシアのN/Aは仕向け先非公表

等穀物・油糧種子への輸出税、本年 2 月 15 日～6 月末までの小麦等穀物への輸出枠の設定などの輸出規制に加え、3 月 14 日にユーラシア経済同盟向けの穀物輸出を禁止した。ユーラシア経済同盟向け以外の輸出は輸出割当内のものであれば輸出可能である。3 月中旬時点で、アゾフ海からの穀物輸出が解除された模様で、黒海沿岸のロシアの港からは輸出可能である。

2 国際価格への影響

中国の旺盛な輸入や米国・カナダの減産等で上昇していた小麦のシカゴ相場は、2 月 24 日のロシアのウクライナへの侵攻を受けて急騰し、小麦の期近物終値（セツルメント）は、3 月 3 日には、過去最高の 2008 年 2 月 27 日の最高値（12.80 ドル/ブッシェル）を上回り、3 月 7 日には史上最高値となる 14.25 ドル/ブッシェルとなった。その後、下落したが、依然として 11 ドルから 12 ドルの高値で推移している。大豆やとうもろこしのシカゴ相場も、南米の高温・乾燥による減産見通しも反映し、高値で推移している。

3 輸入国への影響

（1）小麦

世界最大の小麦輸入国であるエジプトは、地理的にロシアとウクライナから近いことや両国の輸出価格が他の輸出国と比べて安価なことから、従来から両国からの輸入量が多く、両国のシェアは輸入量全体の 8 割を超えていた。国際穀物理事会（IGC）などによると、エジプトは前年以降の小麦の国際価格の上昇に伴い、小麦の国内備蓄の積み増しに取り組み、2 月時点でおおよそ 4 か月分以上の小麦を備蓄しているとみられている。さらに、報道等によれば、先行きが不透明なため、エジプトの貿易公社の GASC は、カザフスタンや EU、米国からの輸入を検討している。また、エジプト国内産の買い入れも促進するとみられている。

同様に、アルジェリアでも、ロシアやウクライナからフランス産への切り替えを検討している。このように、北アフリカの小麦輸入国は、当面、ロシアやウクライナから EU など他の小麦輸出国への切り替えを余儀なくされている。

アジアの主要輸入国のインドネシアでは、報道等によれば、2021 年の輸入量は 1,150 万トンである。主要輸入先の 1 位は地理的に近い豪州であるが、2 位がウクライナで 26% のシェアを占めている。今回のロシアのウクライナ侵攻に伴い、小麦の輸入価格が大きく上昇するとともに、ウクライナ産については他国産への振替を検討しているとみられる。

（2）とうもろこし

とうもろこしについては、中国は、ウクライナから 2021 年に 800 万トン以上輸入しており、米国に次ぐ 2 番目のとうもろこし輸入先となっている。一方、2 月にはロシア産小麦の輸入拡大について両国で合意しており、今後の穀物の輸入動向が注目されるところである。

同様にウクライナ産とうもろこしを飼料向けに輸入していた EU は、南米産とうもろこしに振り替えるのではないかとみられている。

4 今後の見通し

3月末時点で、ウクライナ情勢について今後を見通すことは難しいが、ウクライナでは例年通りであれば4月上旬から、2022/23年度のとうもろこしや春大麦などの春作物の播種が開始される。また2022/23年

度の冬小麦の収穫作業が控えている。戦乱が長引けば、収穫済みの2021/22年度の輸出のみならず、2022/23年度の生育や収穫作業にも支障が生じることになる。現地の農業調査会社の見通しでは、とうもろこしなどの春作物の作付面積が、戦乱の影響で肥料が確保できないなどの理由から4割近く減少するとの見方をしているところもある。

ロシアについても、前年から賦課されている輸出税、本年2月15日～6月末までの輸出枠の設定などの輸出規制に加え、ロシアの金融機関のSWIFT(国際銀行間通信協会：世界的な銀行間の決済システム)からの排除により貿易取引が正常に実施できないことから、今後の穀物輸出に支障が出る可能性もある。

一方、ロシアやウクライナから輸入していた国は他国産への振替を行う必要があるが、輸出余力がある国は限定されている。例えば、アルゼンチンは、小麦もとうもろこし、大豆も輸出可能であるが、すべての品目に輸出税を課している。さらに、国際穀物価格の上昇により国内向けの穀物供給を確保するため、前年末には小麦やとうもろこしには輸出上限数量も設定した。さらに、USDAの3月見通しによれば、エルニーニョの影響とみられる乾燥等により、とうもろこしや大豆生産見通しが引き下げられ、本年3月には、一時31%に引き下げられていた大豆油かすや大豆油の輸出税を33%に戻した。

また、報道などでは、ウクライナ情勢の緊迫化を受け、ハンガリーやセルビアなどウクライナに地理的に近い国で穀物等の輸出規制が報道されている。

なお、当初、鉄道経由でルーマニアから輸出を計画されていたウクライナ産の穀物について、2月の侵攻以降停止されていた黒海からの輸出が、3月24日以降、一部で再開されるとの報道もある。

このような状況から、小麦は史上最高の豊作となった豪州産、とうもろこしは史上2位の豊作となった米国産といった、一部の主要な輸出国にさらに需要が集中する恐れがある。引き続き、ウクライナ情勢の穀物貿易に与える影響について注視していく。

参考 本年3月以降、報道されている穀物等の輸出規制

ロシア：穀物のユーラシア経済同盟向け輸出禁止（14日）

ウクライナ：小麦、とうもろこし等の輸出許可制（6日）

（とうもろこしは24日に解除）

ハンガリー：小麦・とうもろこしの等の輸出ライセンス制（6日）

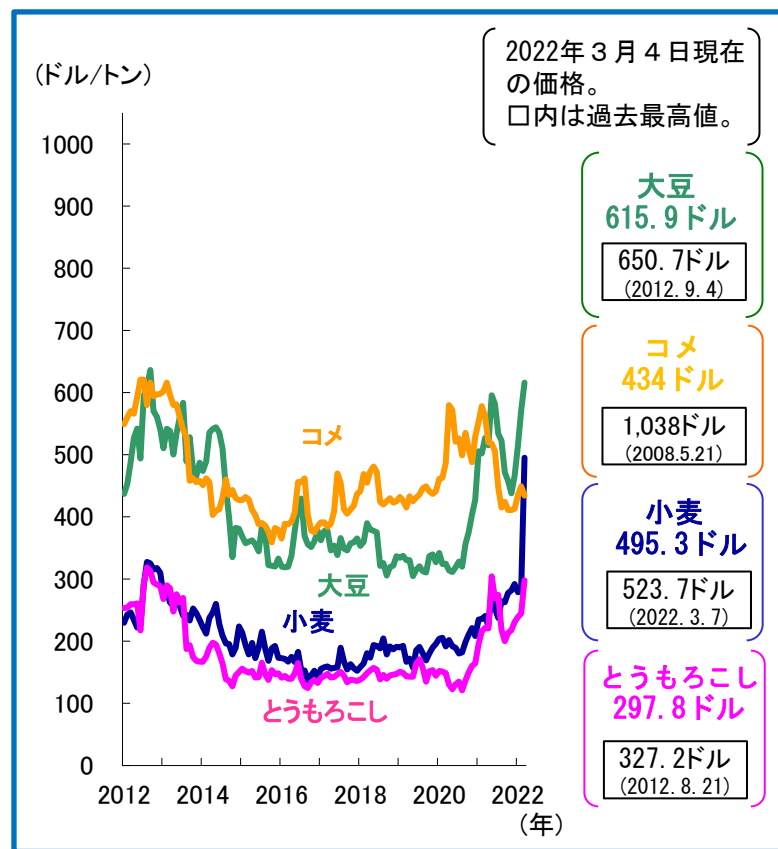
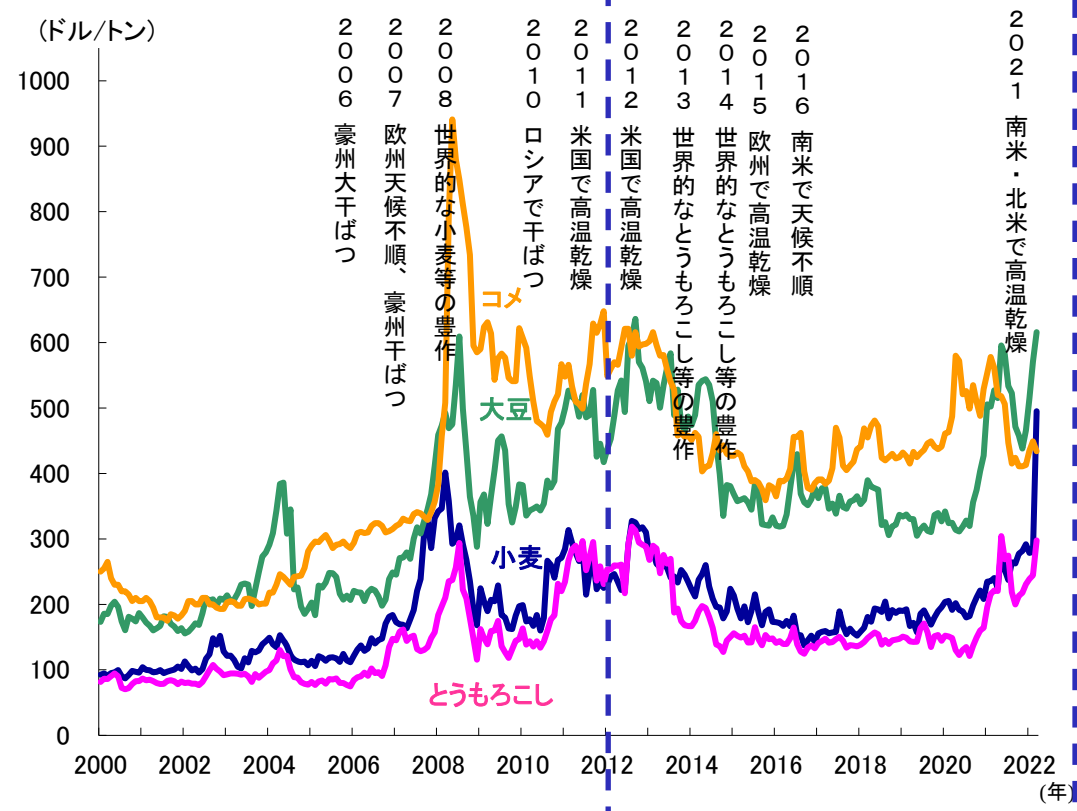
セルビア：小麦等穀物の輸出規制（6日）

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、さらに上昇し、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



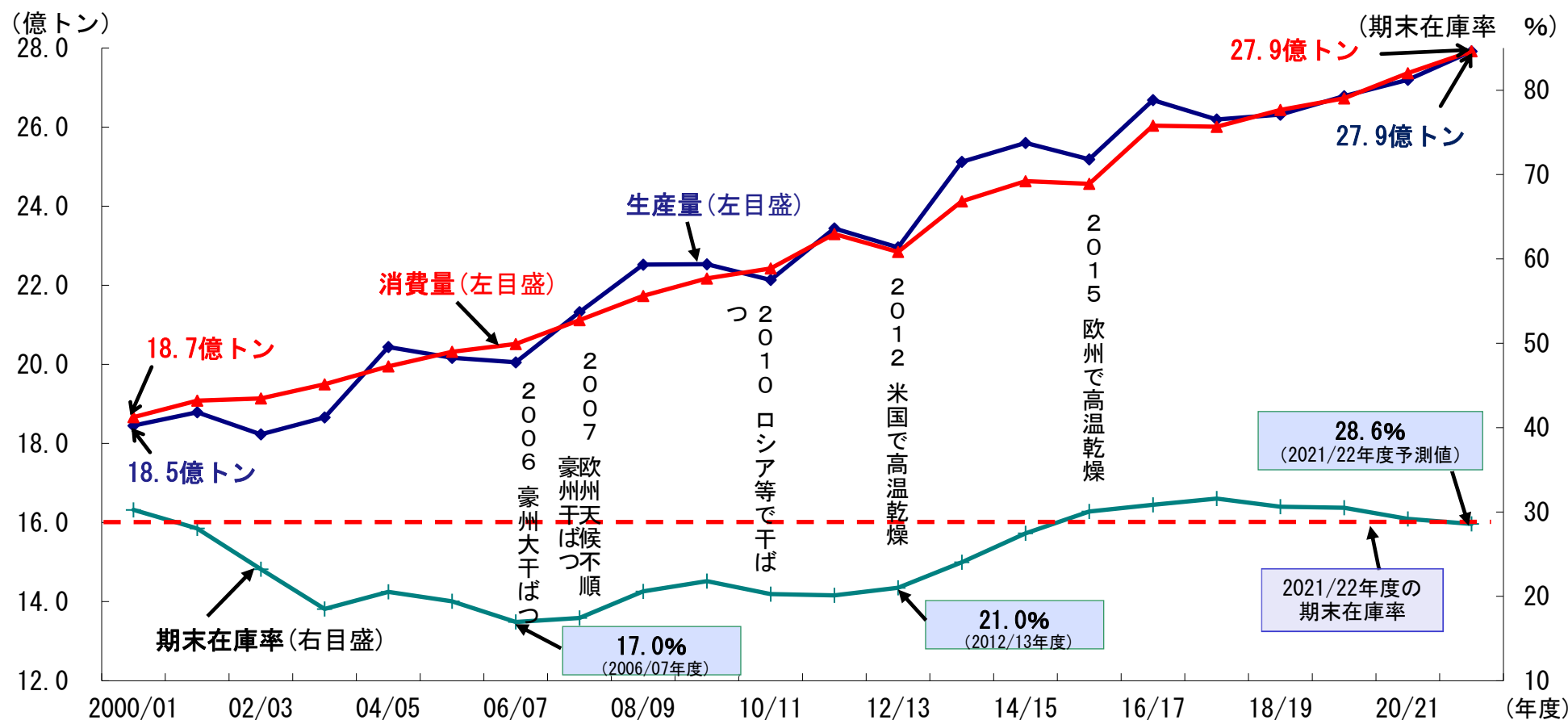
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.6%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

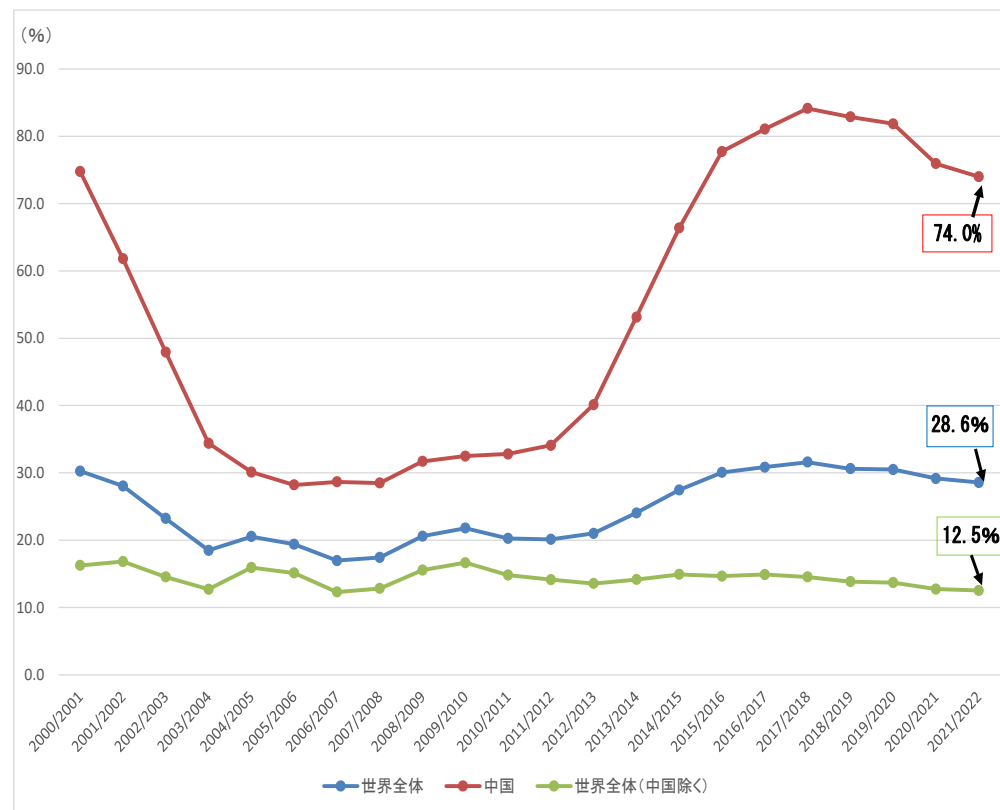


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (March 2022)、「PS&D」

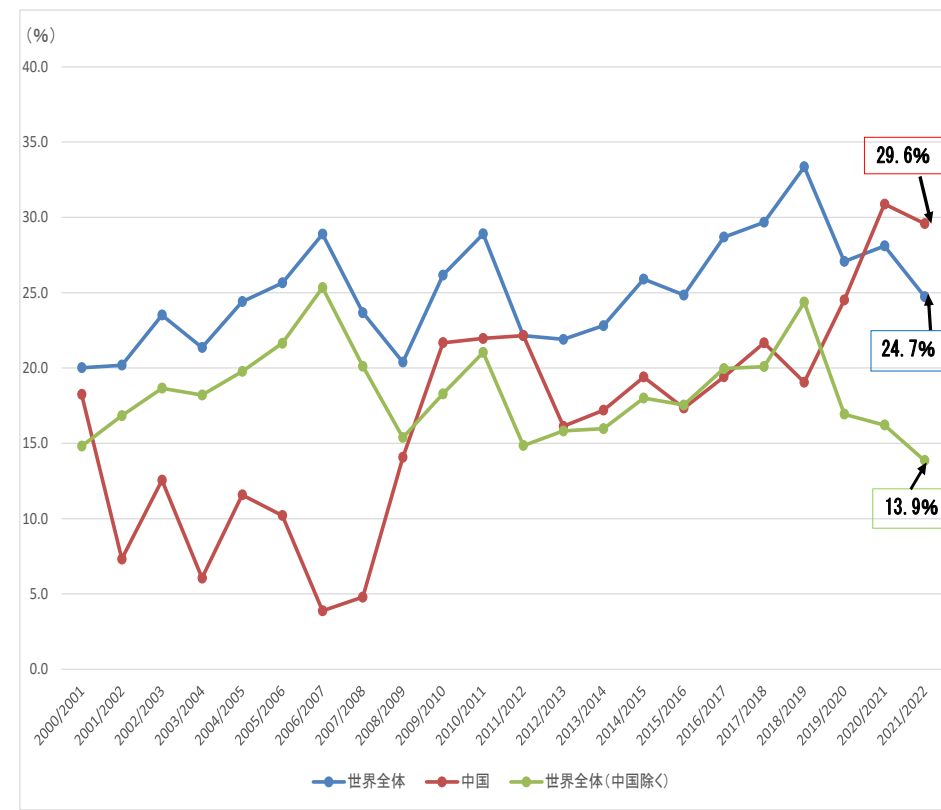
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(March 9, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

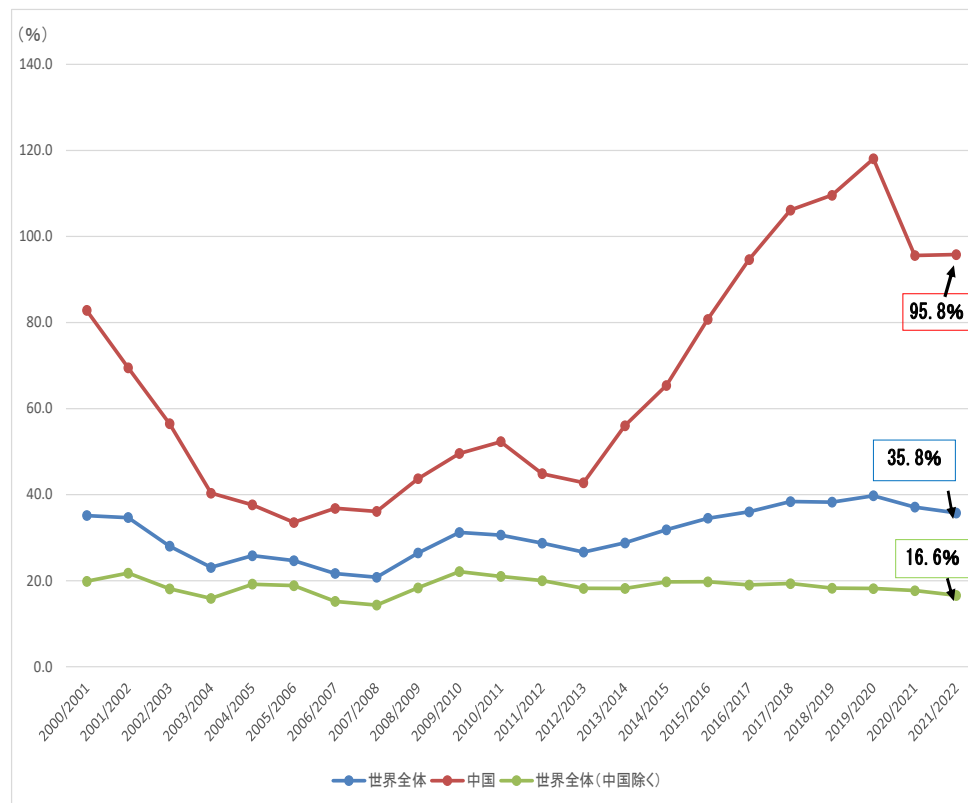
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

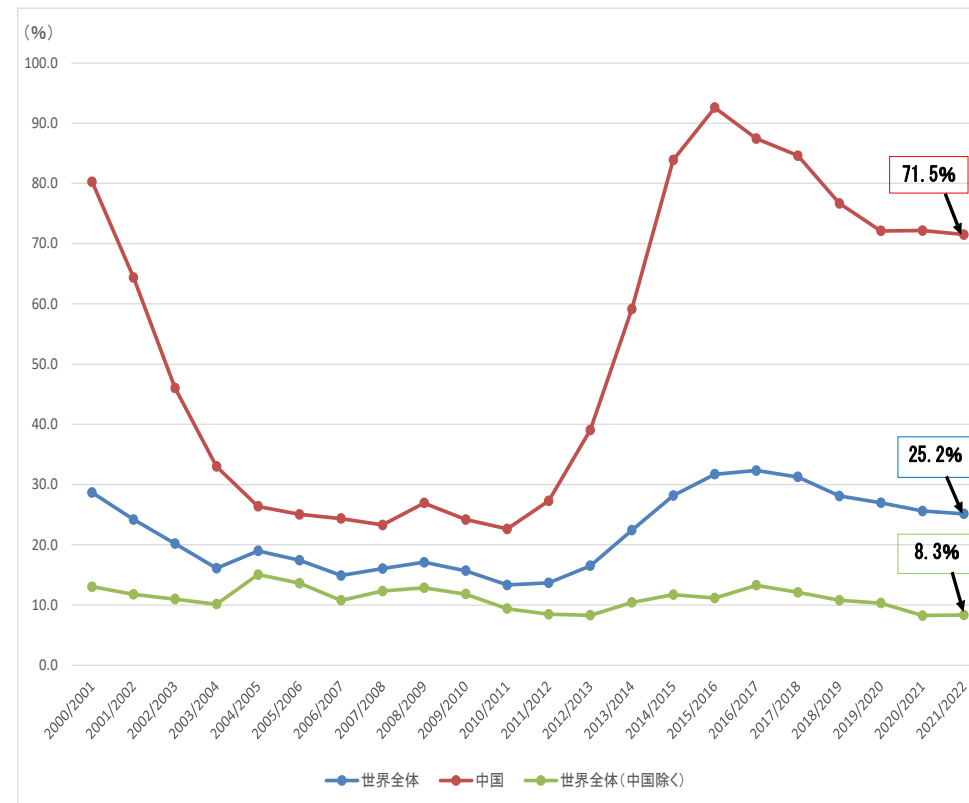
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(March 9, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

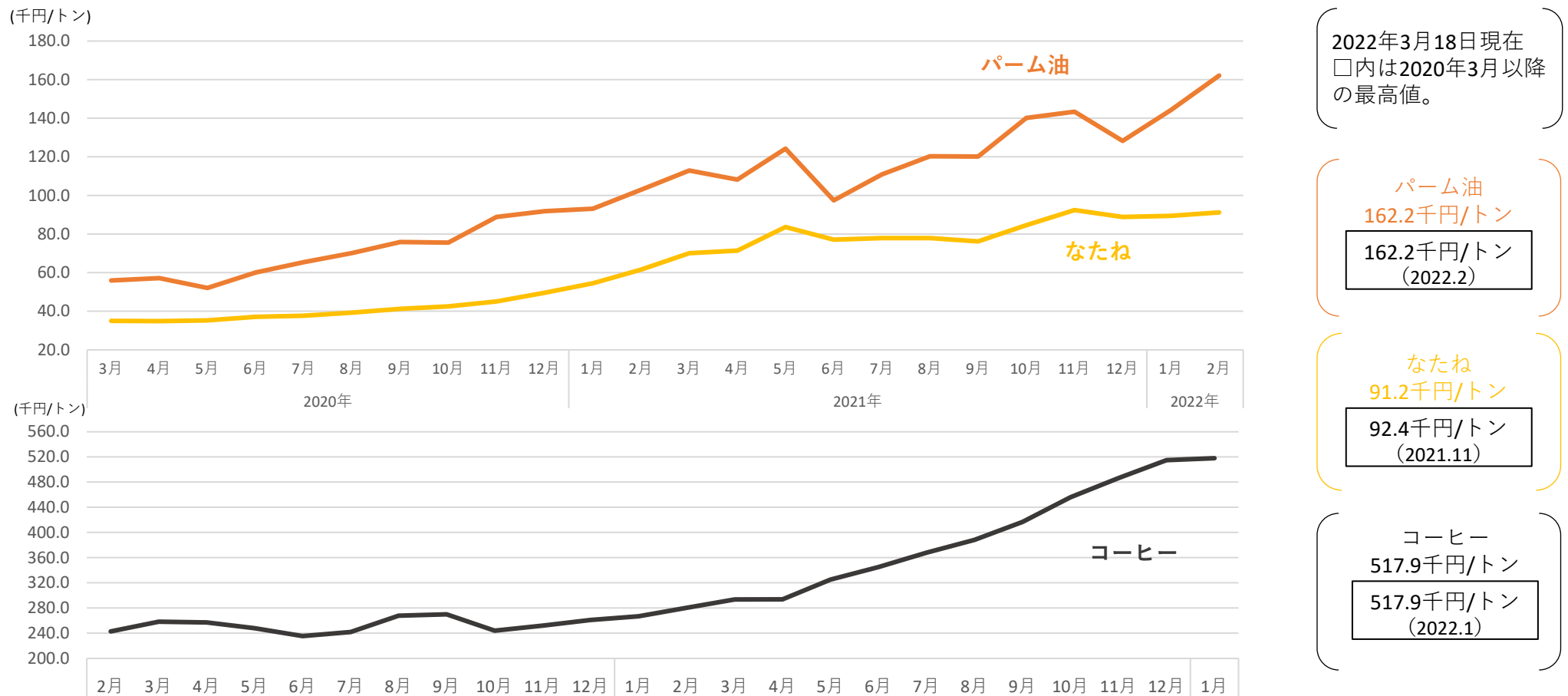
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっているほか、インドネシアによるパーム油の輸出制限が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

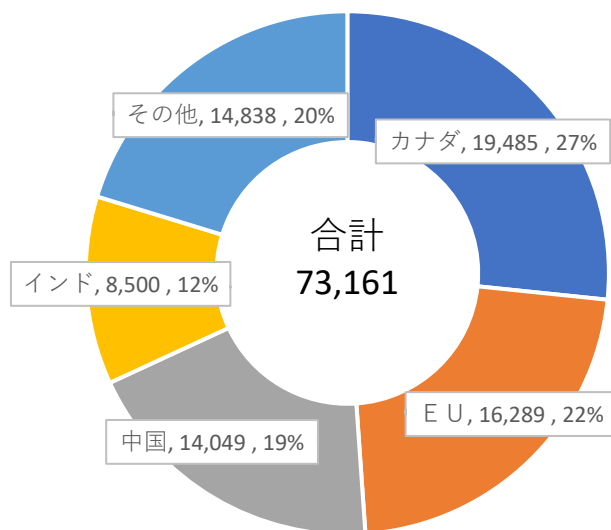


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

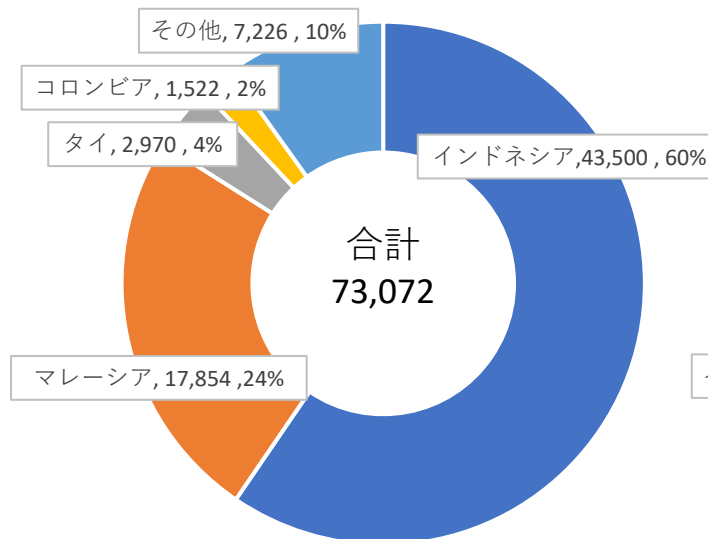
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



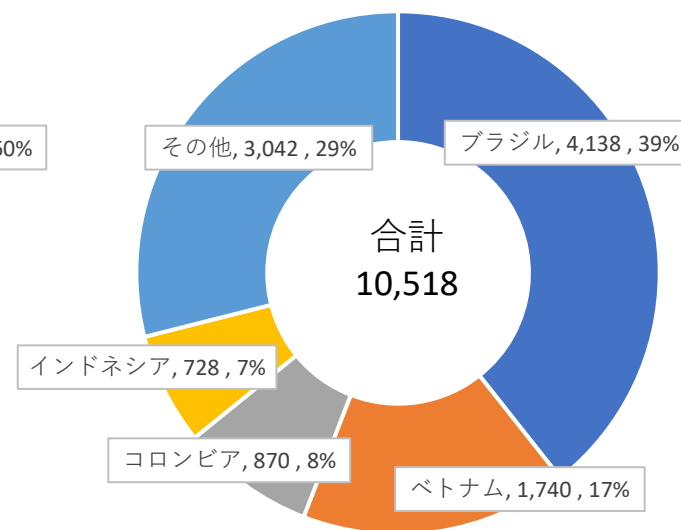
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年	
	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
なたね	35.0	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2
前月比	92.6	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0
前年同月比	91.6	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年	
	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
パーム油	55.9	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2
前月比	78.2	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4
前年同月比	96.0	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年												2021年												2022年
	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	
コーヒ－	242.8	258.3	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	
前月比	95.2	106.4	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	
前年同月比	98.3	108.5	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年2月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.0～128.4(前年同月比で－0.7%～29.8%) の範囲内。

消費者物価指数(総務省) (令和3年9月～令和4年2月)

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3				R4		
品目	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.9	99.6	100.2	101.1	100.0	99.3	99.6	99.7	100.0	103.2	107.1	8.2%
即席めん	96.2	95.7	95.3	98.5	100.0	99.6	100.9	101.0	98.5	100.4	100.9	0.5%
豆腐	98.1	98.6	98.8	99.1	100.0	101.6	102.0	102.6	102.5	102.3	102.1	1.4%
食用油 (キャノーラ油)	106.3	102.7	101.5	100.9	100.0	113.9	118.1	120.5	121.6	124.6	128.4	29.8%
みそ	97.1	96.9	97.4	99.1	100.0	100.0	99.2	99.6	97.6	98.3	99.0	－0.7%
マヨネーズ	103.8	102.3	100.8	100.7	100.0	111.2	112.4	112.5	112.0	112.3	113.3	13.1%
チーズ	97.7	97.3	100.9	101.3	100.0	100.6	98.4	95.9	95.3	98.5	100.2	－0.1%
バター	99.0	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.9	99.8	99.9	99.7	99.9	－0.1%
生鮮食品を 除く食料	96.1	97.0	97.9	99.0	100.0	100.4	100.7	101.0	100.9	101.2	101.5	1.6%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省) (令和3年9月～令和4年3月)

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3				R4				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.0	97.6	97.9	101.3	100.0	98.8	98.6	98.2	98.4	102.1	105.3	104.6	－0.7%	4.9%
即席めん	92.8	92.6	92.4	97.9	100.0	99.0	99.0	99.0	97.8	98.4	98.4	99.0	0.6%	－0.6%
豆腐	102.2	100.8	100.1	100.9	100.0	105.0	100.7	101.1	100.7	101.6	101.1	102.0	0.9%	3.0%
食用油 (キャノーラ油)	99.6	97.9	97.9	103.5	100.0	109.0	112.8	115.3	116.3	119.1	122.9	126.4	2.8%	30.4%
みそ	90.3	91.9	96.6	100.4	100.0	102.7	98.4	98.8	97.5	97.7	98.1	98.4	0.3%	－1.0%
マヨネーズ	99.9	99.1	97.9	103.1	100.0	106.6	106.6	106.6	105.6	105.9	105.9	112.1	5.9%	13.6%
チーズ	95.5	95.2	98.6	100.9	100.0	103.0	98.6	93.6	92.1	98.6	98.6	98.6	0.0%	－1.4%
バター	98.2	98.8	99.0	99.5	100.0	99.5	99.9	99.7	99.7	99.7	99.7	99.7	0.0%	－0.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年4月号（3月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）2021年牛肉輸出量、過去最高を更新

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002062.html

（豪州）肉牛取引価格、牛群再構築の進展により下落傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002065.html

（アルゼンチン）2021年の牛肉輸出量、6年ぶりに減少に転じる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002066.html

◆豚肉

（米国）2021年の輸出量は好調を維持、肥育豚価格は堅調の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002067.html

（EU）豚枝肉卸売価格は回復傾向で推移も、加盟国間で明暗が分かれる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002068.html

◆鶏肉

（ブラジル）鶏肉生産量、国内外の堅調な需要を背景に3年連続で増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002069.html

（中国）2021年の生産量はわずかに増加、価格はおおむね横ばいで推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002070.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）2021年の生乳出荷量は、生乳クォータ制度廃止以降で初の前年割れ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002071.html

（豪州）生乳生産量は引き続き減少、生乳確保のため乳価は上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002072.html

（NZ）乳製品輸出量は減少も、世界的需要の高まりから輸出額は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002073.html

◆飼料穀物

（世界）ブラジルなどで単収減も、世界のトウモロコシ生産量は引き続き史上最高の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002076.html

（世界）南米での大豆減産見通しで、輸出と期末在庫はともに減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002077.html

（米国）米国は、需要量と供給量の据え置きでトウモロコシの期末在庫は変わらず

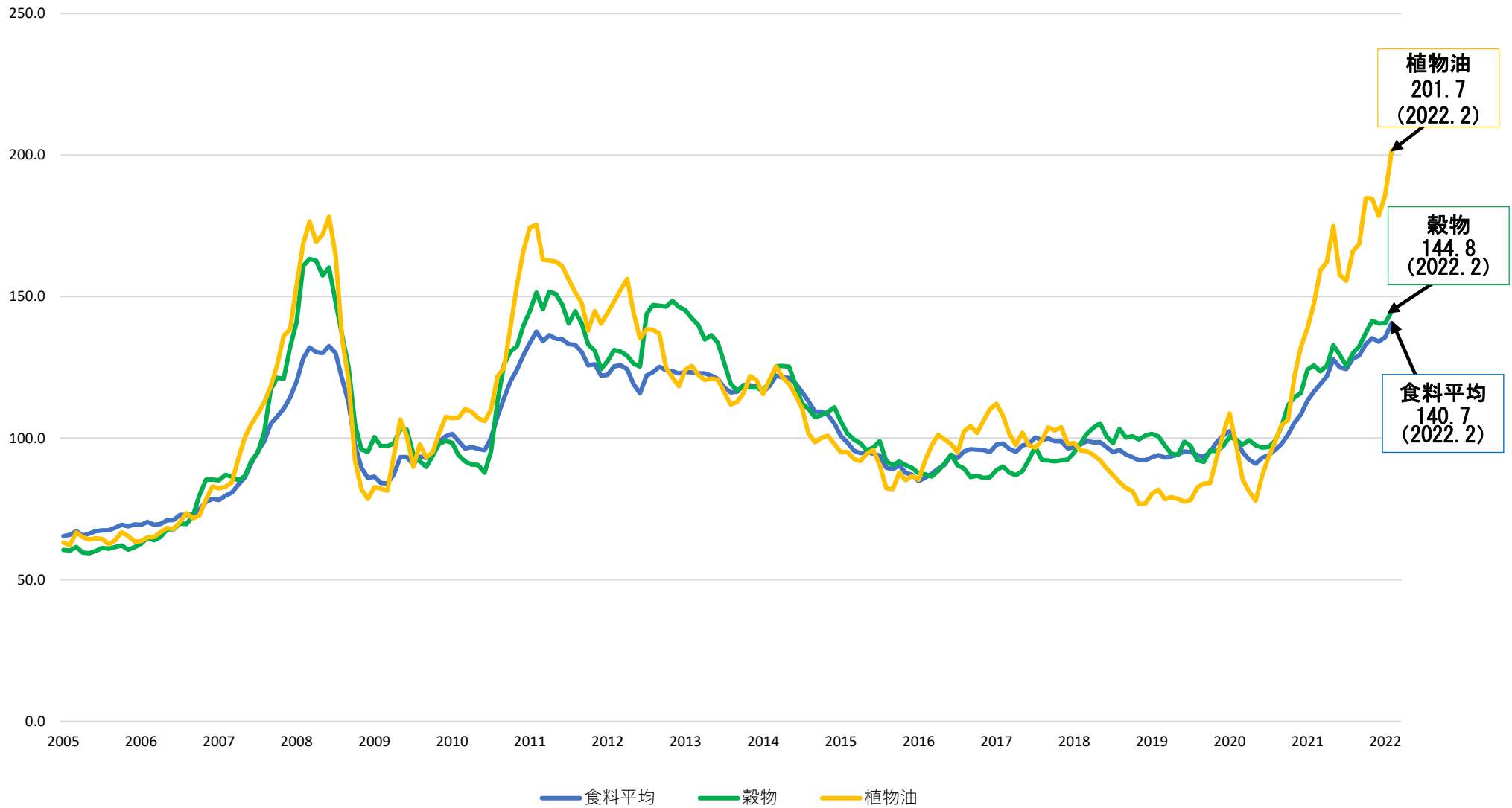
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002078.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002079.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.3)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等